

# 結婚で終わらない喜劇, *Love's Labour's Lost* の構造

小 野 昌

## 序

シェイクスピアの初期の喜劇群の中で『恋の骨折り損』(*Love's Labour's Lost*, 以下 LLL と略す)ほど, その評価の落差の大きな劇も少ないのではあるまいか。Hazlitt の「シェイクスピア喜劇の中からもし何かをはずすとすればこれだ」を最たるものとして, あの改作の全盛期においてすら, 改作上演は1度も行なわれてはいない。しかし最近の再評価の動きの火つけ役となったのは, LLL の祝祭劇としての面に注目した C.L. Barber の *Shakespeare's Festive Comedy* である。

たしかに Plot の展開のおもしろさという面からこの劇をみるならば, 全くおもしろくはないかもしれない。いやそもそも Plot と言えるようなものはないと言ってしまってもよいのかもしれない。しかも喜劇の特徴である結婚によるハッピー・エンドにはなっていないのである。この劇は Romantic Comedy に分類されるのが普通である。シェイクスピアは Comedy の中に中世以来の Romance の要素を巧みにとり入れることによって, Romance の特徴である和解とハッピー・エンドによる大団円に向けて Plot を展開させていくのが通常のやり方である。その Plot の展開のしかたにも一応のパターンがある。それは Romance に限らず, もっとさかのぼって Plautus や Terentius のロ

ーマ喜劇の伝統でもあり、シェイクスピアに限らず当時の喜劇にほぼ共通のパターンでもある。それは主人公達が様々な社会的に障壁にぶつかり、悩み、苦しむのだが、最後にはその障壁をくぐり抜けて、結婚というハッピー・エンドに到るというものである。しかし LLL ではそのような特徴を欠いているばかりか、障壁の設定のしかたも極めて異例のものとなっている。このような点を手がかりにして LLL という劇の特質を考えてみることにしたい。

### 1. バリアの設定

シェイクスピアの *A Midsummer Night's Dream* の 1 幕 1 場で、Hermia は Lysander との結婚を父親の Egeus に反対され、アセンズの公爵 Theseus によって、父親の意志に反した場合には死罪かあるいは修道院に入るかの選択を迫られる。そこでこの厳しいアセンズの法律をのがれて駆落ちすることにし、森で落ち合うことから Plot が展開するのだが、この 2 人の恋人の嘆きの台詞に喜劇一般の恋のバリア (barrier) がどんなものであるのかがよく示されている。

Lysander. Ay me! For aught that I could ever read,  
 Could ever hear by tale or history,  
 The course of true love never did run smooth;  
 But either it was different in blood—

Hermia. O cross! too high to be enthral'd to low.

Lysander. Or else misgraffed in respect of years—

Hermia. O spite! too old to be engag'd to young.

Lysander. Or else it stood upon the choice of friends—

Hermia. O hell! to choose love by another's eyes.

Lysander. Or, if there were a sympathy in choice,  
 War, death, or sickness did lay siege to it.

(I. i. 132—142)

そして Northrop Frye<sup>1)</sup> が指摘しているように、このバリアはしばしば厳しい不合理な法律の形をとることが多いのである。*The Comedy of Errors* では Ephesus に入った Syracuse の人を殺す法律、*The Merchant of Venice* では Shylock の証文の正当性を認め、Antonio を殺そうとした Venice の法律、*Measure for Measure* では Angelo が Vienna の町を高潔な町にするために発令した法律などである。

法律の形式をとらないまでも、*As You Like It* においては嫉妬深い Frederick の暴君ぶりが法律にかわるバリアの役割をはたしている。*Twelfth Night* では Illyria の公爵 Orsino の Olivia に対する恋が、彼女が兄の喪に服しているために成就しないことから始まっている。

このようにシェイクスピア喜劇のすべてにわたって設けられているバリアは LLL においても設定されている。Navarre 王, Ferdinand は3人の廷臣, Berowne, Longaville, Dumain をさそい、3年間学問に専心し、Navarre を小さな academy にすることを提案する。

Navarre shall be the wonder of the world ;  
Our court shall be a little academe,  
Still and contemplative in living art.

(I. i. 12-14)

そしてその3年の間、「女性と会わぬ、学問せよ、断食せよ、眠るな」という厳しい条件が付いている。さらにこの誓いは法律として布告され、罰則まで付いている。そしてさっそく田舎娘の Jaquenetta と密会していたところを見つけた道化の Costard が王によって1週間の断食を命じられるのである。このように LLL の場合にも他の多くの喜劇と同じようにバリアの設定がなされている。ここで注目しておかなければならないのは、他の喜劇においては、このバリアの設定は恋におちる主人公以外の者によって、いわば外側から主人公達を規制し、苦しめるような形で設定されているのに対し、LLL の場合には、

主人公自身が自らの手でそれを設定していることである。

他の喜劇では Frye の言う「反喜劇的社会」は主人公の願望を阻止する方向に作用し、ハッピー・エンドに向かって収束しようとする物語の進展をさまたげる力となって働くのが普通である。Navarre 王のこの誓いはまさに、「反喜劇的社会」の出現にはほかならないのだが、外側から規制されるべき社会を自らの手で作り出してしまっているのである。この反喜劇的社会は喜劇の大団円においては崩壊しなければならないものであり、またそうでなければ喜劇は成立しないのである。そうであるならば王達が自らの手で作りあげたこのバリアも当然破壊されなければならないことになる。

バリアはそれがクリアされることによって、あるいはそれをクリアする過程が劇を進展させる力となるのが普通である。しかし LLL の場合にはこのようなバリアの設定ではその構造の性質上、バリアをクリアするのではなく、それが崩壊する過程を喜劇に転化させざるを得ないのである。この誓いを守り、女性に会わず学問に専心していたのでは、それを喜劇に転化することはできないからである。

このように必然的に破られる構造になっているこのバリアは、設定されたたん、「女性に会わな」という項目から破られることになる。フランス王の使節としてフランス王女、そして3人の侍女、Rosaline, Maria, Katharine がこの Navarre に到着するからである。しかし王は彼女達を宮廷内に招き入れることはせず、庭園で会うことによって誓いを破っていないことにするのだが、所詮それは言いがれに過ぎない。彼等の言動は結局最後まで、このような言いがれに終始することになるのである。

外側から主人公を規制してくるバリアと、LLL の場合のように主人公自身が設定しているものとは、どのような違いがあるのだろうか。外側から規制される場合にはそれは決して主人公の手によって変更されることは全く不可能であり、その強制力は当然かなり強力である。その変更がなされるのは多くの場合、そのバリアを設定した権力者の心変わりという形でおこなわれる。しかもそれは喜劇の大団円において行なわれるのが普通である。その心変わりが喜劇を大

団円に導いて行くと言った方が正確であるかもしれない。*A Midsummer Night's Dream* では Hermia に父の言うことを聞かなければ死罪か修道院に入るかの選択をせまった Theseus は全く突然に彼女の父親を説得して, Ly-sander との結婚を許可するのである。*As You Like It* では公爵 Frederick は老僧に出会い, 突然に改心し, 前公爵を殺すことをやめてしまったばかりか, 彼に領地まで返還することにするのである。

このように強い強制力を持つ外的なバリアに対し, LLL の場合はどうであろうか。権力者が勝手に自分達を束縛するために設定したバリアは Costard と Jaquenetta の密会に対して示されたように, 自分達以外の目下の者達に対しては罰を与えることによってそれなりの強制力を示してはいる。しかし王自身に対する強制力は当然のことながら弱いものとならざるを得ない。それは Berowne がこの誓約に署名する以前に指摘していたことである。

Necessity will make us all forsworn  
 Three thousand times within these three years' space;  
 For every man with his affects is born,  
 Not by might master'd, but by special grace.  
 If I break faith, this word shall speak for me,  
 I am forsworn on mere necessity.

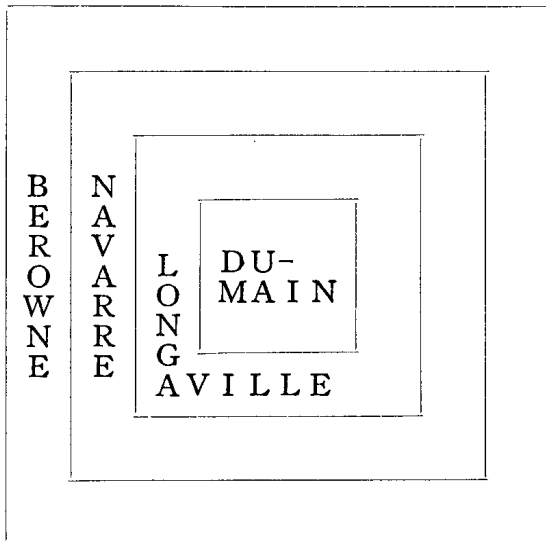
(I. i. 148—152)

## 2. バリアの崩壊

この necessity によってフランス王女の一行に会ってしまった国王達は, さらに誓いを破ることになるのである。国王は王女に, Berowne は Rosaline に, Dumain は Katharine に, そして Longaville は Maria に一目ぼれしてしまう。このように主人公が一目ぼれで恋におちるのは Romance の最も重要な基本的パターンではある。しかし Romance では愛と友情の矛盾や葛藤が起ったり, 三角関係が生じたりするのであるが, LLL の場合には全員が一目

ぼれするものの、全員が片思いで、一目ぼれした相手もそれぞれが異なる相手であり、三角関係は全く生ずることもなく、きわめてメカニカルな組み合わせとなっている。

このように男女の組み合わせを単純なものにしておいて、シェイクスピアは恋人達同志の葛藤を描くかわりに、誓を破った男達が密かに次々に自分達の恋心を吐露し、全員が恋のソネットを読む場面を立ち聞きされるという形で喜劇的な効果を出しているのである。



まず Berowne が1人で登場し、Rosaline にソネットを送ったことを告白する。次に王が来るのに気づいて木にのぼり、王が王女に対するソネットを読むのを盗み聞きし、王は繁みに隠れて、Longaville が読むのを聞き、Longaville は Dumaine が読むのを聞く。Biron だけが他の3人の恋の告白を盗み聞きし、Dumaine だけは全員

に聞かれて自分はだれのソネットも聞いていないことになる。つまりこれは Dumaine を中心にし、Berowne を一番外側にする4層の入籠構造を形成している<sup>2)</sup>。そしてこの4人がそれぞれに恋の告白をしおえたところで、こんどは先の順序とは逆の順序で、自分の告白は聞かれてはいないと思っている各人があの誓約違反に対する非難を開始する。Longaville が Dumaine を、そして王が内側の2人を、そして最後に一番外側にいて、内側の3人の告白は聞いたが、自分の告白は聞かれていない Berowne がその強みを発揮して居丈高に他の3人を、特にすぐ内側の王を非難する。しかしそこに彼が Rosaline に送ったソネットがもどってきて、彼もまた誓約違反の罪を白状させられるのである。

シェイクスピアはこのように、かなり大がかりで複雑なしくみを用いて、彼等1人1人のバリアの崩壊を何重にも拡大し、強調して我々の前に示しているのである。1人1人の違反の罪は、他の人の告白を盗み聞きすることによって

拡大され、さらに自分のことは棚に上げて他人の非難することによってさらに拡大され、それを聞いた外側の人物によって非難されることによってより一層複雑なものとなっているのである。このようなしくみを使うことによってシェイクスピアは主人公達の使っていることばが、いかに信頼性のないものであるかを示していると考えられるのである。

このように自らの手で作り、自らの手で破壊してしまった内なるバリアは、今後どのように劇を転回させていくのだろうか。Berowne の恋も発覚し、彼の恋人、Rosaline の色の黒さを散々からかって、王はそんなことを言い合っている自分達の愚かさに気づく。

King. But what of this? Are we not all in love?

Berowne. O! nothing so sure; and thereby all forsworn.

King. Then leave this chat: and, good Berowne, now prove  
Our loving lawful, and our faith not torn.

Dumain. Ay, marry, there; some flattery for this evil.

Lingaville. O! some authority how to proceed;  
Some tricks, some quilllets, how to cheat the devil.

Dumain. Some salve for perjury.

Berowne. O! 'tis more than need.

(IV. iii. 279—286)

そこでみんなは Berowne に誓約違反を正当化するための理論武装をたのむのである。彼は75行にもおよぶ長舌をふるい、みごとな詭弁を弄して自己正当化を行なう。あげくのはてに、この誓約を破ることが神の道に通じるのだと結論づけるのである。

Berowne. Let us once lose our oaths to find ourselves,  
Or else we lose ourselves to keep our oaths.

It is religion to be thus forsworn ;  
 For charity itself fulfils the law ;  
 And who can sever love from charity ?

King. Saint Cupit, then ! and, soldiers, to the field !

(IV. iii. (357—363))

男性の主人公達は誓約違反を反省し、バリアを再構築しようとはしないで、いかにしてその罪を正当化するかという方向に向かって行く。Berowne のお墨付をもらって、彼等は一気に恋人の心を勝ち取るべく行動を開始するのである。ここに完全にバリアの無くなった世界が出現するのである。

### 3. バリアのない世界

このようにして、Romance のコンベンションであるバリアは劇の途中で完全に崩れ去り、彼等の行動を規制するものはなくなってしまった。そこで彼等はフランス王女と3人の侍女達にさかんにプロポーズのことばをあびせかけるのであるが、そのことばは彼女達のからかいの的になるだけで、全く問題にされず、すべて冗談としか受けとられないのである。彼等が真剣になって口説けば口説くほど、彼女達のからかいの度はひどくなるばかりである。ここでは言語がコミュニケーションの手段として機能しない状況が生まれている。彼等の目ざした「反喜劇的社会」の住人達は、そのバリアが取り除かれるとすぐに、嘲笑の対象に変わるのである。喜劇の進行を阻止するはずの彼等は、今や喜劇の推進役としての機能を持たされているのである。詭弁を弄することによって自ら作ったバリアをすり抜けた王達は、ここで言語のすれ違いによって報復を受けることになるのである。

このように惨々な大敗を喫した王達は、こんどは他の登場人物を総同員して「九人の英傑」(Nine Worthies) の余興を演じさせることにするのだが、その演技に対して彼等は執拗な野次をあびせかける。特に学校教師の Holofernes に対する野次は強烈で、彼に演技ができないようにしてしまう。彼はたまりか



ねて、「これはあんまりです、紳士のなさることではない。礼儀に外れている」と言う。正常な機能を失なった言語はここで一種の混乱したパニック状態に陥いるのである。

この騒然とした状況の中に、突然フランスの使者 Marcade が登場し、フランス王の死の知らせをもたらす。フランス王は一度も舞台に現れることはない。けれどもフランス王の死は LLL においては重要な転換点となる。どんちゃん騒ぎのファナティックな、一種の祝祭的な雰囲気は一瞬にして日常の正常な感覚に引きもどされる。

Mercade. I am sorry, madam ; for the news I bring  
Is heavy in my tongue. The king your father—  
Princess. Dead, for my life !  
Mercade. Even so : my tale is told.

(V.ii. 708—711)

Marcade の台詞は完全な文の形にはなっていないが、それでもコミュニケーションは完全に成立している。それに対して Navarre 王達のことばは、口数だけは多いものの、意志は全く伝わっていない。ここにこの両者の間に、饒舌と簡潔という、ことばの両面の際立った対照をみせている。この死の知らせによってよみがえった日常感覚によって、この劇中での言語機能が回復してくる。Navarre の王達とフランス王女との間に正常なコミュニケーションが再開されるのである。

#### 4. 新たなバリアの設定

正常な言語機能の回復によって、王達のプロポーズもようやく彼女達の考慮の対象となった。しかしフランス王の喪中のためにすぐに結婚ということにはならない。そこで彼女達はそれぞれに結婚の条件を示してくる。喪中の期間に合わせて、結婚は1年後という、この4組に共通の条件が設定される。しかも

今度は誓いなどということばは信用されず、完全な実行が前提となっている。フランス王女が Navarre 王に出してきた結婚の条件とは次のようなものである。

Your oath I will not trust ; but go with speed  
 To some folorn and naked hermitage,  
 Remote from all the pleasures of the world ;  
 There stay, until the twelve celestial signs  
 Have brought about the annual reckoning.  
 If this sustere insociable life  
 Change not your offer made in heat of blood ;  
 If frosts and fasts, hard lodging and thin weeds,  
 Nip not the gaudy blossoms of your love ;  
 But that it bear this trial and last love ;  
 Then at the expiration of the year,  
 Come challenge me, challenge me by these deserts,  
 And, by this virgin palm now kissing thine,  
 I will be thine.

(V.ii. 784—797)

試練の期間が3年から1年間へと短くなってはいるものの、この条件は内容だけを見る限り、王の劇の冒頭の誓いとそれほど異なっているわけではない。けれども王の誓いは女性を退け学問に専念することによって名声を得、死を越えて永遠に名を後世に残すこと、つまり愛を拒否し Nature を越えることを目標にしていた。それに対しフランス王女のこの条件は結婚を前提にすることによって拒否されている愛を獲得し、結婚という Nature に引きもどすのが目的である点で正反対のものとなっているのである。

本来ならば劇のはじめで出されるべき結婚の条件が、このように最後になっ

て出されることをどう考えたらよいのであろう。この条件は新たなバリアの設定なのだと考えられはしないだろうか。王自らの手で作った異例の内的なバリアは自らの手で破壊してしまった。そこでシェイクスピアは通常の Romance のコンベンションにしたがって、新たに結婚によって終るハッピー・エンドに結びつく、外側からの強固なバリアを設定し直したのではないか。しかもバリアの前提が愛の拒否から、愛の獲得へと、全く逆の組み換えが行なわれているのである。

Berowne も Rosaline から結婚の条件を提示されるのであるが、それは次のようになっている。

Rosaline. You shall this twelve month term from day to day,  
Visit the speechless sick, and still converse  
With groaning wretches; and your task shall be,  
With all the fierce endeavour of your wit  
To enforce the pained impotent to smile.

Berowne. To move wild laughter in the throat of death?  
It cannot be; it is impossible:  
Mirth cannot move a soul in agony.

(V.ii. 840—847)

彼の長所でもありまた、最大の短所でもある機知を用いて、毎日、苦しんでいる病人のところへ出かけて行って彼等を笑わせろとは、Berowne が思わず、「そんなことはできません、不可能です」と言うほど厳しい条件である。しかし彼の人を嘲笑する癖を矯正するためには最高の条件ではある。Rosaline という女性は頭脳明晰であり、色の黒さが特徴として描かれてはいるが、その他の性格ははっきりと示されてはいない。けれども他の3人の女性にもある程度あてはまることではあるが、彼女には特にシェイクスピア喜劇によくみられる、たとえば Portia や Rosalind のような、男性を教育する教師の役割が与

えられていると言える。そしてここでも王の場合と同じように、Berowneにも病人をなぐさめるという愛の行為、そしてさらに Charity が求められているのである。このような条件が満たされてはじめて、彼は Rosaline との結婚というハッピー・エンドへと向うことができるのである。この条件はそれが彼にとってどんなにふさわしく、教育的であろうと、厳しいバリアが設定されてしまったことには違いないのである。

これまでに述べてきたように、普通ならばこのような外的なバリアは劇の最初において設定され、それが劇の枠組を形作っており、主人公はそのバリアをクリアするか、あるいはバリアの設定者の心変わりなどによってハッピー・エンドに向うのである。しかし LLL では劇の最後になって改ためて設定し直された形になっており、1年後の4組の結婚を予感させはするものの、結婚によるハッピー・エンドを舞台の上で観ることはできないのである。そしてこの新たな外的なバリアは厳しいものではあるが結婚の条件として提示されているために、ヒーローとヒロインの結婚を引きさく形で設定されている通常のバリアと異なり、2人を結びつける方向で設定されているのである。

この新たなバリアによって我々は舞台の上で結婚による祝祭に参加することはできない。我々の期待は、いわば肩すかしに終わるのである。1年後の結婚式では Berowne が嘆いてみせるように ‘That too long for a play.’ ということになる。しかしシェイクスピアは結婚によって終わる終わり方が喜劇の重要な要素であることを十分に意識していたことは次の Berowne の台詞の中にうかがい知ることはできるのである。

Our wooing doth not end like an old play ;  
 Jack hath not Jill : these ladies' courtesy  
 Might well have made our sport a comedy.

(V. ii. 864—866)

Jack と Jill が様々なバリアを乗り越えてめでたく結婚するのが喜劇の基本的

なパターンであることは認識していながら、恐らく彼はあえてそのようなコンベンションを選ばなかったのであろう。それは王達が劇の冒頭で自分達であるバリアを設定した時から決まっていたのかもしれない。結局王達はどのバリアもクリアしていないのである。やはり試練に耐えた者達しか結婚による祝祭に参加することはできないからである。新たに結婚の条件として出されたバリアを苦労して越える過程を劇化するには、それこそ全く新しい劇をもう1つ書かなければならないのである。

バリアを越える苦労を描くとすれば、それは Plot を中心にして展開せざるを得なくなるであろうが、シェイクスピアは LLL においてはそのような手法を用いてはいない。この劇の中には冒険とか事件は全く起こらないのである。唯一、事件らしきものはフランス王の死であろうが、それもニュースとして知らされるだけで、しかも彼は舞台には1度も登場しないのである。この事件の無さが示しているように、この劇には場所の移動がほとんどないのである。*The Merchant of Venice* のように Venice と Belmont の間を行き来することもなければ、*As You Like It* や *A Midsummer Night's Dream* のように森と宮廷が対照的に扱われることもない。ほとんどすべて、Navarre 王の庭園内で行なわれるのである。そして男性の主人公達はロシア人の仮装をして王女達と踊ろうと、何マイルも歩いてきたふりをした位で、action の無い劇となっている。そして基本的には、フランス王女の来訪に対する reaction だけである。これらのことは、LLL という劇がいかにか Plot 中心の劇ではなく、場面を中心とした劇であることを示している。

このようにシェイクスピアは場面を中心にして物語を展開しながら、そこで使われることばの遊戯にその精力を集中している。LLL は作者が、自分の持てる英語の能力を最大限に発揮して、ことばの遊戯を極限まで実験した劇であると言えるのである。これまで述べてきた彼の劇作上の様々な工夫は、結局この目的を達成するための工夫であったとも言えるのである。それは Navarre 王が、他のあらゆることを犠牲にして学問に専心すると誓いながら、リクレーションには、頭の中にことばの鑄造所を持っていると言われる Armado を

使おうと考えていることから、ことばへの関心の強さが伺えるのである。そして主人公達のことば遊びの caricature として登場するのが Sir Nathaniel であり、Holofernes なのである。シェイクスピアはこのような人物達を登場させることによって、自分のことば遊びの願望を満足させ、同時に特にことばに関心が強く、Jack と Jill の結婚するような劇はあきあきしている特殊なグループの観客を満足させるためにこの劇を書いたのであろう。

このようなことば遊びを中心にして極限まで拡大してしまった Art の世界は当然 Nature の世界からの挑戦を受けるのである。死を超越し、時間を無視しようとした王達の試みは、フランス王の突然の死の知らせによって急転回する。彼等の Art の世界に Nature の世界がゆさぶりをかけてきたのである。その時から、今まで忘れられていた時間が動きはじめるのである。時間に対する言及が急にふえてくるのはそのためである。ことばも通常のコミュニケーションの機能を回復してくる。ことばの鑄造所を持つと言われた Armado は Jaquenetta を妊娠させ、彼女のために3年間、鋏を握ると誓うのである。

このような LLL の Nature の世界の勝利を明確な形で示しているのが、劇の最後に歌われる、春と冬のかげ合いの歌であるのだが、その検討は稿を改めなければならない。

#### 注

(本文中のシェイクスピアの作品の引用、行数、役名は *The Arden Shakespeare* 版による)

- 1) Northrop Frye, *A Natural Perspective*, (Columbia University Press, 1965), p. 72.
- 2) Keir Elam, *Shakespeare's Universe of Discourse*, (Cambridge University Press 1984), p. 24.